学校事例 2

広島県立尾道北高校

生徒による授業評価と入試問題分析で、学びの意欲を高める授業を実践

学習意欲の低下が課題であった広島県立尾道北高校では、授業評価によって生徒の学習意識を探り、授業に反映させている。入試問題分析も行って基礎学力の重要性を認識させ、意欲を高める授業の実践を目指す。

生徒の授業態度が良いと教師は安心してしまう

広島県立尾道北高校は県内有数の進学校であり、2010年度入試の国公立大現役合格率は68・6%に上る。1999年度は39・2%と、十年余りで進学実績が大幅に向上した。その契機となったのは、98年度の単独選抜への移行だ。国語、数学、英語では1年次から習熟度別の少人数授業を導入。授業のレベル設定に具体的な大学名を掲げるなどして、生徒の目的意識の向上を図った。

目標に見合った授業を行うため、教師の意識転換も図った。入試問題分析に力を注ぎ、それを基にシラバスを作成。生徒の学力や学習意欲などを把握して、指導を柔軟に改善することに努めてきた。ところが、単独選抜への移行当初は生徒の実態把握に困難を感じる面があったと、松井太教頭は言う。

「当時も今も、本校にはどの授業も真面目に受ける生徒ばかりです。たとえ、本心では意欲がなくても授業態度は良いため、教師は『自分の指導に問題はない』と安心してしまう面がありました。その結果、模試の成績が予想外に悪く、慌てて対策を迫られる事態がたびたびありました。年を追うごとに、一部の生徒に学習意欲の低下が目立ってきているのも課題でした」

同校は朝や放課後の補習が充実し、「塾に通わなくても志望校に合格できる高校」と地域から評価され、進学実績も着実に伸ばしてきた。しかし、ここ数年は通塾率が少しずつ上がり、学校の教科指導の求心力が低下しているのではないかと考え、指導改善が急務であるとの共通理解に至った。教育研究部長の高村聖悟先生は次のように語る。

「今までの授業は、知識を教え込む指導の傾向がやや強く、知識を生かして考えさせる授業にはなっていなかったのではないかと考えました。そこで、『量から質へ』をキーワードに、生徒が主体的に考えて意欲的に学ぶ授業への転換を図ろうとしました」

生徒による授業評価で見えにくい「内面」を探る

同校が授業改善の軸に据えたの

PROFILE

広島県立尾道北高校

◎「至誠一貫」を校是、「自尊・自恃・自制」を校訓とする。1998年度に総合学科に移行した。広島県から、2003年度に「進学指導拠点校」、09年度には難関国公立大進学を目指す「トップリーダーハイスクール」に指定されている。

設立　1925(大正14)年

形態　全日制／総合学科／共学

生徒数（1学年）　約240人

10年度入試合格実績（現浪計）　国公立大は、東京大2人、京都大5人、大阪大10人、岡山大21人、広島大16人など計173人が合格。私立大は、同志社大、立命館大、関西大、関西学院大に計76人など、延べ353人が合格。

住所　〒722-0046　広島県尾道市長江 3-7-1

電話　0848-37-6106

Web Site　http://www.onomichikita-h.hiroshima-c.ed.jp/

は、生徒による授業評価だ。大学入試分析や模試結果分析も行っているが、生徒の学力状況を把握するだけでは不十分であり、生徒の授業に対する構えを把握し、それに適した授業をすべきだと考えたからだ。

授業評価は、年2回、総合学科の原則履修科目と「総合的な学習の時間」を除く全授業で実施する。10年度は、「板書・行動」「学習支援」「目標理解」など八つの質問項目を設定し、5段階評価とした（**図1**）。生徒一人当たり10～13科目を履修しているため、回答数は8000以上となる。項目ごとに集計し、学校全体、各学年、講座ごとの平均値を出し、項目間の相関関係を分析する。

05年度に導入してから3年間は授業者自身がアンケート結果を集約し、どのように授業を変えるかは個々の教師に任されていた。しかし、回を重ねるごとに教師の意識は変化していったという。

「どの教師も生徒の声が授業改善に役立つと実感する一方で、『一人で出来ることには限界がある』という考えを強めました。『板書の評価が平均値より低いから工夫してみよう』といった改善は自分ですぐに出来ますが、データ分析は独力では困難です。そこで、08年度からは、過去に実績のあった授業評価のノウハウを本校に導入し、学校全体でデータを共有して組織的な授業改善に取り組むことに決めました」（高村先生）

広島県立尾道北高校教頭
松井 太 Matsui Futoshi
教職歴27年。同校に赴任して1年目。「常に現場にコミットしていきたい」

広島県立尾道北高校
皆川佳美 Minakawa Yoshimi
教職歴24年。同校に赴任して8年目。総括教科主任。「生徒には多くの人を支え続け、努力を続けてほしい」

広島県立尾道北高校
重森佳裕 Shigemori Yoshihiro
教職歴21年。同校に赴任して5年目。進路指導部長。「成長なくして成就なし」

広島県立尾道北高校
高村聖悟 Takamura Seigo
教職歴23年。同校に赴任して3年目。教育研究部長。「誠意をもって貫く」

図1　授業評価アンケートの質問項目（2010年度）

		A	B	C	D	E
質問1	【板書】《一般科目》板書や資料類は見やすく、かつ整理されていますか。 【行動】《実技科目》どのような行動をとればいいのか、指示がわかりやすいですか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
質問2	【学習支援】先生は、授業の中で、「なぜそういえるのか」「どうしてそうなるのか」など、生徒に考えさせるようにしてくれていますか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
質問3	【ガイダンス】この科目の目的や学習方法について先生から具体的な指示がなされましたか。	十分な指導があった	ある程度の指導があった		あまり指導はなかった	指導はなかった
質問4	【目標理解】この授業の目標や計画、学習内容の意義を十分に理解していますか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
質問5	【難易度】教材や授業、課題の難易度は、あなたの学力・技能を効果的に伸ばすのに適切ですか。	難しすぎる	やや難しい	ちょうどよい	やや易しい	易しすぎる
質問6	【分量】教材や課題の分量は、あなたの学力・技能を効果的に伸ばすのに適切ですか。	多すぎる	やや多い	ちょうどよい	やや少ない	少なすぎる
質問7	【効果】この授業を受けて学力や技能の向上を実感しましたか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない
質問8	【学習意欲】この授業を受けて、興味関心が深まり、授業・家庭学習・部活動等主体的に取り組むようになりましたか。	非常によく当てはまる	よく当てはまる	やや当てはまる	あまり当てはまらない	当てはまらない

＊学校資料を基に編集部で作成

「見通し」を持った学習が学びの意欲や効果を高める

同校の実践から、授業評価を指導に結び付ける過程を見てみよう。10年度は、5月から6月にかけて校内公開研究授業を行った。教師全員が授業を公開し、他の教師の授業を参観し、指導改善の方法を検討する。

1回目の授業評価は7月に実施。8月下旬に出た結果を踏まえて、教師は担当授業の現状理解（結果の原因推定）、優先課題と改善案を「個人分析シート」に記入する。10月、校長はこのシートを基に教師一人ひとりと話し合い、改善の方向を確認。並行して教科単位での改善策も進める。個人の課題分析に加え、年度当初に教科で設定したテーマに照らした個人の改善案を教科主任に提出し、教科全体で改善を検討する。

個人と教科単位の二方向からの改善案を具体的に授業に反映させる場が、11月の学校を挙げた互見授業だ。授業評価を踏まえ、課題解決の方法を確認し合う。そして、12月に2回目の授業評価を実施。改善案の効果を確認し、次年度の指導に生かす。

10年度は、質問項目の相関関係に着目し、今後の授業改善に結び付く重要な結果を導き出した。8の質問項目は三つに大別できる。

①インプット指標―授業での教師の働き掛けの度合い（質問1～4）

②アウトカム指標―働き掛けによる効果、結果の度合い（質問7、8）

③負荷指標―授業における生徒への負担の度合い（質問5、6）

「アウトカムはインプットの結果」と仮説を立てて考えて、どのインプット指標がアウトカム指標の結果を左右しているのか、相関係数を算出した（**図2**）。すると、インプット指標の質問4「この授業の目標や計画、学習内容の意義を十分に理解していますか」は、アウトカム指標のいずれの項目とも相関が強いことが分かった。つまり、生徒に授業の目標や計画、学習内容の意義を十分に理解させることで、学習効果（質問7）、学習意欲（質問8）共に効果的な向上が期待できると考えられた。

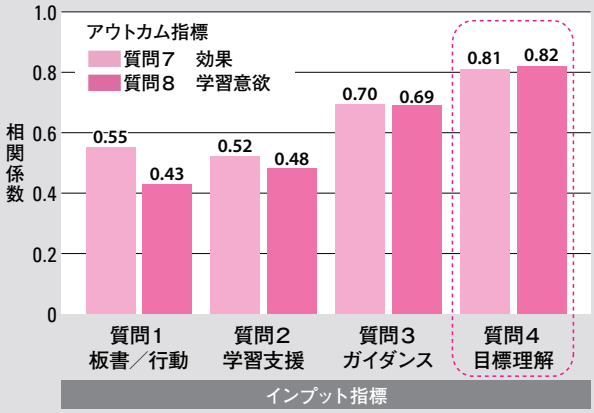
「この結果は、09年度の分析結果とほぼ同様でした。まずは教師自身が授業の狙いや目標、意義をしっかり理解させ、生徒が見通しを持って学習できるように促すことの重要性を改めて認識しました。年度当初に科目の目的や学習方法（予習、小テスト、復習、準備、演習）についても具体的に指導することが必要です」（松井教頭）

この結果を踏まえ、現在は学校全体で質問4にかかわる指導に力を入れている。年度初めに開く科目ガイダンスをそれまで以上に充実させ、必要に応じて単元や授業の冒頭で目標・計画・意義の理解を促す。

授業だけでなく、補習にも工夫を凝らす。例えば、数学の補習ではセンター試験の目標点を基準に希望を取ってクラスを分け、意欲や学習効果の向上を図る。総括教科主任の皆川佳美先生は次のように語る。

「これまでは教師が一方的に教える授業が大半でしたが、生徒が見通しを持って自分で学習を進め、分からない時に教師に質問するような指導に改めました。目標を明示したことと相まって、以前よりも一生懸命に授業に取り組む生徒が増えたと感じています」

図2　インプット指標とアウトカム指標の間の相関関係



質問4・目標理解は、アウトカム指標の質問7・効果、質問8・学習意欲のいずれとも相対的に相関がかなり強い　＊学校資料を基に編集部で作成

授業改善の一環として全教師で入試問題を分析

授業評価の他に、大学入試分析を授業改善に生かすことにも力を入れている。毎年、全教師が東京大と任意の1大学（担当授業の難易度に相当する大学やセンター試験から選択）の入試問題を分析し、結果を共有する。これは、同校が総合学科へ

の移行時からの取り組みだ。進路指導部長の重森佳裕先生は、東京大の入試分析に教師全員が取り組む意義を次のように説明する。

「東京大の入試問題は、分量が多く、難易度の高い問題もありますが、高校で求められる学習内容が的確に反映されている良問ばかりです。他大学が出題の参考にすることも多いので、東京大だけは全員が分析することにしています」

分析項目は、解答形式や分量、難易度、問題の特徴、指導上の留意点など。分析結果は3年生を対象とした「入試問題セミナー」で使うと共に、日々の授業、定期考査や校内実力テストの問題、補習で用いる教材などに活用する。また、教師が自分で問題を解くことで、生徒にどれくらいの学力が必要かがより具体的に実感でき、進路指導の充実にもつながる。3学年団だけでなく、全学年の教師が取り組むことにも大きな意味があると、松井教頭は強調する。

「受験対策と称してことさらに難問を生徒に解かせようとすることもあります。しかし、東京大の入試問題分析によって、基礎の大切さを改めて認識できます。1、2年生を指導するうちから東京大などの過去問に取り組むことで、自信を持って、生徒に基礎の重要性を実感させる指導が出来るようになると思います」

個々の教師も、指導にさまざまな工夫を凝らす。

「1年生でも解けそうな難関大の問題を出すと、生徒は目を輝かせて取り組みます。そのような表情を見逃さず、学習意欲の向上に結び付けていく指導こそが大切だと思います」（皆川先生）

このように、同校にとって入試問題分析は、個々の大学の対策というよりも、授業改善の一環としての意味合いが大きい。教師全員が入試問題の傾向を共有し、授業に反映できるため、3年間の指導の一貫性を保つ上でも重要な指針となっている。

自立した学習を支える生徒の「授業評価力」

授業評価をはじめとした一連の取り組みにより、授業に対する生徒の意識の向上も期待している。重森先生は、これを「生徒の授業評価力の育成」という言葉で表す。

「教師が授業中に脱線して興味のある話をしてくれたら、それを『面白い授業』と感じる生徒は多いでしょう。しかし、『自分に力が付いたか』という視点に立てば、面白い授業が必ずしも良い授業とは限らないと理解できます。授業評価を通して、生徒がそのような視点で授業を捉えられるようになってほしいと考えています。自分に力が付いたかを判断できれば、『今の自分が何を学ぶべきか』も判断できるようになります。そうした姿勢は自立した学習の支えになるに違いないからです」

それでは、「力が付く授業」とはどのような授業なのか。同校の教師は「分かる授業」との違いを意識しながら授業を組み立てていると言う。

「授業評価の質問項目の中では、学習の難易度や分量についても質問しています。『ちょうどよい』という回答が多い授業は生徒にとっては『分かり易い授業』と言えますが、生徒に力が付く授業は生徒が『やや難しい』と少し負荷を感じる授業だと考えています。『難しすぎる』と生徒の意欲は削がれてしまうので、難易度を十分に考慮して授業を進めています」（皆川先生）

生徒が学びへの意欲を高めるためには、学習の目標・計画・意義への理解を促す指導が有効なアプローチになり得ると、授業評価の分析結果から分かった。そうした指導と並行し、個々の教師が自らの力を高める努力を続け、生徒を学びに導くことにも努めたいと、松井教頭は語る。

「教師自身が各教科の『学習者』の一人であるという姿勢を生徒に見せることが必要です。教師が教科の面白さや、今学んでいる内容の先にある世界を見せ、そのベクトルに引っ張っていくことが、教師の教科指導力だと思います」

教師が媒介となり、考えることの楽しさや自分が伸びていく喜びを生徒に実感させる授業を目指し、同校はこれからも実践を重ねていく。